

Social Swearing の相互構築¹⁾ 成員カテゴリー化と会話の連鎖を中心に

玉城里奈

(沖縄県那覇市立那覇中学校)

The Discursive Co-Construction of Social Swearing: Membership Categorization Device and Interactional Sequencing in Interaction

TAMASHIRO Rina

(Naha City Naha Junior High School, Okinawa)

Abstract. The use of taboo words and bad language like “fuck” and “shit” is a part of daily conversation in English. This speech phenomenon is called swearing. According to Takamasu (2000), swearing shows one’s anger and strong emotion by using taboo words. In a swearing setting, only the unpleasant sound of taboo words is used and taboo words should not be interpreted literally. Swearing has two main functions. One is to curse someone or something, and the other is to confirm membership solidarity, which Ross (1969) initially termed, “social swearing.” Although Anderson and Trudgill (1990) propose two types of swearing to explain its function, Tsuda (1999) argues that the context of interaction is a crucial factor that determines the function of swearing.

This paper examines some social swearing scenes from movies by employing the methods of ethnomethodology, conversation analysis, and talk-in-interaction analysis so as to demonstrate how interlocutors discursively co-construct social swearing.

The results show that social swearing is used even between people who have met for the first time. In the first meeting setting, participants interactively try to achieve the same membership category and use swearing to quickly develop a close relationship. I named this type of swearing “rapport building swearing.” The results of this paper clearly illustrate how interlocutors interpret the functions of swearing and how they co-construct conversational sequences locally as their conversation unfolds.

0 . はじめに

英語の映画や音楽には、fuck や shit など通常タブー語又はバッドランゲージとして捉えられることばが多く見られる。スウェアリングと呼ばれるこの言語現象は、日本語にはあまり見られないもので、日本人英語学習者にとって英語母語話者のスウェアリングは理解し難いものだ。高

増(2000)によるとスウェアリングとは、fuckなどのタブー語を用いて怒りや苛立ちを表すことで、スウェアリングの場面ではその語が本来持つ意味は意識されず、タブー語の持つ不快な響きのみが利用されるだけである。英語のスウェアリングの機能は大きく分けて2つある。それは、通常の罵りのスウェアリングと、Ross(1969)の言う仲間同士の連帯を確認するための合図として機能する social swearing である。Anderson and Trudgill(1990)は、スウェアリングの機能を判断するために2つの分類法を提示している。そして津田(1999)は、Anderson and Trudgill(1990)のスウェアリングの分類法によってどのような場面でスウェアリングが Ross(1969)の言う仲間同士の連帯を確認するための social swearing として用いられるのかを、スウェアリングの種類と対話相手とに分類して考察しようと試みている。しかし、その結果としてスウェアリングがどのような機能を持っているかは相互行為における前後のコンテキストによって判断するしかないと結論づけている。

仲間同士の連帯を確認するための合図として機能する social swearing は、話者との関係構築の際に大きな役割を果たすため、英語学習者は、social swearing を使用できる程度までいかなくとも、social swearing に関する知識を持ち合わせていることが求められる。よって social swearing に焦点を当てて研究を進めることにした。研究を進めていくうちに、これまで社会的距離の近い間柄において起こるとされてきた social swearing だが、初対面という間柄においても会話の参加者同士が共同で social swearing を作り上げていく様子が見られた。また、人間は必ず何らかの成員として会話に参加している。そのため、お互いに対する背景的知識を持ち合わせていない初対面という間柄においては、会話を通してお互いの成員カテゴリーが組織される様子が必ず見られだろうと予想し、成員カテゴリーに焦点を当てて分析を進めることにした。よって、本論文では、初対面という間柄で、会話の参加者が共同でどのような成員カテゴリーを作り上げることで、スウェアリングを social swearing として機能させるのかを明らかにするため、エスノメソドロジー、会話分析、相互行為分析を用いて映画・ドラマをデータとして研究を試みた。その結果、初対面という間柄では会話の事前連鎖において同じ成員カテゴリーに属しているということが達成されてはじめて、スウェアリングが social swearing としてはたらくことが明らかになった。そして、初対面という間柄において用いられる social swearing にはすばやく話者間の仲間意識を構築する機能があることが分かった。これを本論文では、「仲間意識を構築するスウェアリング」と名づけ、その構築過程を会話の連鎖に注目し、提示している。

本論文の構成として、はじめに英語のスウェアリングの先行研究、方法論として扱うエスノメソドロジー、会話分析、相互行為分析の先行研究を紹介し、先行研究を踏まえた上で本論文の研究課題を提示する。そして、エスノメソドロジー、会話分析、相互行為分析の手法を使って初対面という間柄において social swearing がどのように構築されるのかをデータを元に提示し、考察する。

1. スウェアリングの先行研究

スウェアリングという言語行動を定義するにあたって、Anderson and Trudgill(1990)の *Bad Language* という本を参考にする。Anderson and Trudgill(1990)によるとスウェアリングには下記の3つの特徴がある。

文化の中でタブーもしくは、汚名をきせられるもの、

文字通りの意味で解釈すべきでない、

強い感情や態度を表すために用いられる。(p. 53)

また、スウェアリングで用いられるタブー語のことを特にスウェアワードと言う。つまりスウェアリングとは、一般的に口に出すことを社会的に許されていないタブー語 (taboo words) を用いて、自分の怒りや苛立ち、そして強い感情を表すことである。このようなスウェアリングの場面では、そのタブー語自体が本来持つ意味は意識されず、タブー語の持つ不快な響きのみが利用される。そしてこのスウェアリングで用いられるタブー語はスウェアワードと呼ばれる。ここでスウェアリングの例としてよく耳にする“Fuck you!”を取り上げてみる。この fuck という語は本来「～と性交をする」という意味を持つ。しかし、スウェアリングとして“Fuck you!”が用いられる場合、fuck 本来の「～と性交をする」という意味は意識されず、「くそっ!」「ちくしょう!」と解釈される。つまり、スウェアリングでは fuck の本来持っている意味はなくなり、fuck というタブー語の持つ不快な響きのみが利用される。そして“Fuck you!”の中で用いられた fuck がスウェアワードとなるのである。

通常、罵り語として用いられるスウェアリングに、仲間同士の連帯を確認するポジティブなはたらき (social swearing) があることは、いくつかの先行研究でも述べられている。津田 (1999) によると、スウェアワードの機能として罵りのスウェアリングの他に、親しさを表すスウェアワードがあり、高増 (2000) も喜びや冗談に用いる肯定的なスウェアリングがあると説明している。また、Holmes (1992) は、ポジティブ・ポライトネスの概念を用いて、罵りとしてのスウェアリング以外に、親しさ、価値観の共有に用いるスウェアリングがあると説明している。更に Ross (1969) は、スウェアリングには精神的ストレスに対する反応として用いる罵りのスウェアリングとしてはたらく annoyance swearing と、仲間同士の連帯を確認するための合図としてポジティブな機能を持つ social swearing の 2 つがあると説明している。これらを踏まえて、本論文では、スウェアリングには大きく分けて罵りのスウェアリングと、social swearing という 2 つの機能があると見なす。

では、スウェアリングが罵りのスウェアリングと social swearing のどちらの機能を持つかはどのように判断すべきか。Anderson and Trudgill (1990) は、スウェアリングの機能をその形式から EXPLETIVE (感情表出のスウェアリング)、ABUSIVE (悪態のスウェアリング) の一次的機能と、HUMOROUS (ユーモラスなスウェアリング)、AUXILIARY (補助的なスウェアリング) の二次的機能に分類している。

EXPLETIVE

強い感情を示すが、ある事物や人に向けて発せられるものではない。

例: Hell!, Shit!, God damn it!

ABUSIVE

ある事物や人に向けて発せられ、軽蔑的で中傷やさまざまなのろいのタイプを含む。

例: You asshole!, You bastard!, Go to hell!

HUMOROUS

ある事物や人に向けて発せられるが、軽蔑的な意味はなく、しばしば ABUSIVE の形をとるが、反対の機能を持ち、侮辱するというよりは、遊びと言えるもの。

例: Get your ass in gear!

AUXILIARY

人や状況に対して発せられるのではなく、スピーキングのスタイルとして用いられ、強調的ではない。

例: this fucking X , Bloody Y (p. 61)

しかし、Anderson and Trudgill のスウェアリングの分類法は、分類の境界線があいまいで、どのタイプもコンテキストによっては罵りのスウェアリング、social swearing のどちらにもなりうる。一方、高増 (2000) はそのような分類の仕方を批判し、下記のようにスウェアリングの機能を訂正し、エクストラティブ (Expletive) とエピセツト (Epithet) に分類し、それぞれの特徴を次のように述べている。

エクストラティブ (Expletive)

- (a) 話し手が通常好ましくない感情や態度を表すために用いる語句である。時には、好ましい感情や態度を示すために用いることもある。
- (b) その感情や態度は、何らかの原因によって起こされ、何らかの対象に向けて発せられる。時にはその対象が明確でないこともある。
- (c) しばしば感嘆形式で用いられる。例えば、Fuck!, Oh shit!のように感嘆詞的に、God damn you!, Damn you! のように願望法で、Go to hell! のように命令法で用いられる。また、Open the fucking door. や What the hell are you doing?のように、統語形式への挿入辞としても用いられる。

エピセツト (Epithet)

- (a) 人、物、状況などを形容する名詞句である。
- (b) He's cunt! や You son of a bitch! のように、言及語あるいは呼びかけ語として用いられる。
- (c) 通例ある対象に対する話し手の否定的、軽蔑的な態度が示されるので、その対象に対する悪態や中傷として、すなわち言葉による攻撃として機能する。しかし、時には Hi, fuckface! のように、話し手の好ましい、親しい態度が示されることもある。(pp. 51-52)

高増は、Anderson and Trudgill のようにスウェアリングの形式でその機能を分類しようとはしておらず、コンテキストを考慮した分類法を提示している。しかし、エクストラティブ (Expletive) とエピセツト (Epithet) はどちらも罵りのスウェアリング、または social swearing になりうるため、本研究の分析に有効であるとは言えない。

スウェアリングの機能について分かっていることは、通常罵り語として使用されるスウェアリングに、それとは相反する機能を持つポジティブな意味を持つ social swearing が存在するという事実だけで、罵りのスウェアリングと social swearing を判断する指標は明らかになっていない。

2. 分析方法

本論文では、スウェアリングが、どのようなコンテキストにおいて social swearing として機能するのかを明らかにするため、エスノメソドロジー、会話分析、相互行為分析を用いて映画・ドラマをデータとして social swearing の研究を試みる。

会話分析は、Garfinkel によって提唱されたエスノメソドロジーを Sacks が発展させたもので、しばしば相互行為分析とも呼ばれる。(相互行為分析という概念は、会話分析よりも会話をより幅広く分析する方法論として、会話分析と区別され使われることがある。) 会話分析は、会話という社会的行為の中で私たちが何を達成しているのかを、会話の構造から解明するものである。ここで、本研究で分析の際に用いた会話分析の手法について、簡潔にまとめておく。

2.1. 成員カテゴリー化装置 (Membership Categorization Device)

山崎 (2004) によると、Sacks は自殺防止センターへの電話データの分析の中で、成員カテゴリー化装置の考え方を導入している。Sacks は、自殺願望者が自殺防止センターのスタッフに対して「誰も助けてくれる人はいない」「誰も頼りになる人はいない」と繰り返し語ることに注目した。自殺志願者は、自殺防止センターのスタッフを「助けてくれる人」と考えて電話をしているにもかかわらず、なぜ自殺防止センターのスタッフに「誰も助けてくれる人はいない」「誰も頼りになる人はいない」と言うのか。Sacks の成員カテゴリー化装置によると、通常、自殺防止センターのスタッフは自殺に関する悩みの「専門家」として分類され、それに対し自殺志願者は「素人」というカテゴリー対を形成する。しかし、自殺志願者の「誰も助けてくれる人はいない」という発言から、スタッフを必ずしも助けてくれる人である「専門家」として考えてはいないことが分かる。ここで適用できる成員カテゴリー化装置は他にもある。自殺を考えるような危機的な状況において頼るべき R (Relational Pair : 関係対) は「家族」や「身内」である。この R を適用すると、自殺願望者にとって初めて電話で話す相手である自殺防止センターのスタッフは、「家族」や「身内」とは対比される「赤の他人」という成員カテゴリーに属することになり、頼るべき相手ではないことになる。つまり、「誰も助けてくれる人はいない」と言う場合、自殺志願者は自殺防止センターのスタッフを助けてくれる「専門家」とは捉えておらず、初めて電話で話す相手、つまり頼るべき人でない「赤の他人」として捉えているのである。このように、Sacks の成員カテゴリー化装置の考え方は、同じ人間が別のことばで分類され、カテゴリー化される可能性を示唆している。更にそうした成員のカテゴリー化が相互の会話を通して交渉され、変化していく様子を会話の展開そのものの中に見出している。

2.2. 連鎖 (Sequence)

Sacks は、同様に自殺防止センターへの電話の分析で、電話をかけてくる人が自分の名前を告げないことが多いことに注目し、その点から会話連鎖について述べている。Sacks は、話し手が次の番になって行うこと (B) は、前の話し手がそのすぐ前の番で行ったこと (A) に関係しており、この AB をペアと呼び、この相互に関係しているペアが一つ以上連なったものを連鎖と呼んでいる。連鎖を考慮に入れた場合、電話の受け手である自殺防止センターのスタッフの「ミスター・スミスです。どうなさいましたか。」という発言は、電話の発話を開始するはたらきをしていると同時に、電話の掛け手が自分の名前を告げるための「わく (スロット)」を提供するものとしてもはたらいていると言える。(サーサス、1998)

このように、連鎖を考慮に入れた場合、一つの発話が成し遂げるはたらきは、ただ一つだけに限定されているのではなく、いろいろなはたらきをする。注目する一つの発話を見るだけでは、その発話のはたらきを知ることはできない。同じ発話でも、連鎖や文脈によって異なったはたら

きや意味を有することもある。よって、発話の連なりである連鎖を見ていくことで、一つ一つの発話のはたらきや意味することが見えてくる。

2.3. 隣接ペア (Adjacency Pair)

サーサス (1998) によると、シェグロフは、友人同士の日常の電話から災害センターや仕事の電話まで広範囲に収集し、電話の開始の連鎖の分析を行った。シェグロフはこの分析で、会話の第一の基本構造である隣接ペアを発見した。サーサス (1998) に述べられている隣接ペアの特徴を以下に挙げる。

1. 範囲は (少なくとも) 2 つのターンである。
2. (少なくとも) 2 つの部分を持つ。
3. 第 1 ペア部分は一方の話し手によって作られる。
4. 第 2 ペア部分は他方の話し手によって作られる。
5. すぐ次のターンへと連鎖していく。
6. 2 つの部分は相対的に配列され、第 1 のものは第 1 ペア部分の集合に属し、第 2 のものは第 2 ペア部分の集合に属す。
7. 2 つの部分は弁別的に関係しており、第 1 部分の属しているペア類型は第 2 ペア部分の選択に関連してくる。
8. 2 つの部分は条件関連性の関係にあり、第 1 部分は第 2 部分で生じることを準備し、第 2 部分は第 1 部分で生じたことに依存する。(p. 45)

このように、隣接ペアとは「問い」 - 「答え」というように、隣接している発話から成る。「問い」が「問い」として機能しているかは、その返答である隣接ペアによって分かる。よって一つの発話が会話の中でどのように機能しているのかを知るためには、少なくとも隣接ペアを見る必要がある。

2.4. 会話の順番取りシステム (Turn-Taking System)

山崎 (2004) は Sacks, Schegloff, & Jefferson の代表的研究を踏まえた上で、会話の順番取りシステムは、「順番構成的成分」と「順番配分的成分」の 2 つから成ると述べている。「順番構成的成分」は、1 人の話し手がどれくらいしゃべることができるのかを決めるもので、私たちは単語、句、文といったことばの単位で話をしている。また、私たちはこれらの単位でなされた発話がどこで終わるのかを予期することができる。この単位の最初の終了点が、発話の順番が適切に移行する場、つまり発話の移行適切所 (transition relevant place) である。一方、「順番配分的成分」はどのように順番が交替するのかを決めるもので、「順番交代のテクニック」と「順番の交代に関する優先規則」から成る。「順番交代のテクニック」には、

- (1) 今の話し手が次の話し手を選択する
- (2) 話したい人が自分から話し手となる

がある。一方、「順番の交代に関する優先規則」には、

- (1) 今の話し手が次の話し手を選択したならば、選択された人が優先的に次の話し手となる。
- (2) 今の話し手が次の話し手を選択していない場合、話したい人が次の話し手となる。
- (3) 誰も自分から話し出さない時は、今の話し手が更に話を続けることができる。

発話の移行適切所では、このように(1)~(3)が繰り返され、会話が展開していく。会話の順番取りシステムが規則的に運用されていれば、発話と発話の割り込み、オーバーラップ、沈黙は最少化する。しかし実際の会話において、割り込み、オーバーラップ、沈黙が見られないわけではない。山田(1999)によると、割り込みやオーバーラップは、発話が完結する可能性を持っている点で起こる傾向にある。発話の完結点を無視した割り込みも実際見られるが、これは相手に話を聞いていないと受け取られる可能性がある。そして沈黙は、選択された次の話し手が話し始めない場合、その人に属する沈黙となる。発話の連鎖がいったん完結し、誰も話し出さないことがある。このような沈黙は、誰にも属さない沈黙である。

2.5. 修復 (Repair)

私たちは会話の途中でいつでも修復を試みることができる。Have(2000)によると、私たちは何か問題が起きた時に修復を行う。修復は、発話の移行適切所で起こる。修復には4つの種類があり、自己開始の修復連鎖(self-initiated repair)は、自分から修復の連鎖を開始するタイプで、他者開始の修復連鎖(other-initiated repair)は、他の参加者によって修復の連鎖が開始されるタイプである。これらは誰が修復の連鎖を開始するのかを表すものだ。一方、自己修復(self-repair)は、自分で修復を行うタイプで、他者修復(other-repair)は、参加者が修復を行うタイプである。これらは誰が修復を行うのかを表すものだ。つまり、修復が連鎖でない時は、自己修復(self-repair) 他者修復(other-repair)のどちらかになる。

3. 研究課題

スウェアリングの先行研究から、スウェアリングの機能を判断するには、コンテキストが重要だということが分かった。これまで社会的距離の近い間柄において起こるとされてきた social swearing だが、初対面という間柄においても会話の参加者同士が共同でスウェアリングを social swearing として作り上げていく様子が見られた。人間は必ず何らかの成員として会話に参加している。そのためお互いの背景的知識を持ち合わせていない初対面という間柄においては、会話を通してお互いの成員カテゴリーが組織される様子が必ず見られるだろうと予想し、成員カテゴリーに焦点を当てて分析を進めることにした。

よって、本論文では、初対面という間柄で、会話の参加者が共同でどのような成員カテゴリーを作り上げることで、スウェアリングを Ross(1969)の言う仲間同士の連帯を確認するための合図や、親しさ、価値観共有の表明、喜び、冗談に用いるポジティブな機能を持つ social swearing としてはたらかせるのか、その過程を提示したい。エスノメソドロジー、会話分析、相互行為分析の手法を用いてその組織、機構、構築過程を明らかにするため、

social swearing の連鎖(事前連鎖、隣接ペア)を組織することで、成員カテゴリーはどのように作り上げられるか。

social swearing の連鎖でターン(会話の順番取り、沈黙、オーバーラップ、割り込み)はどのように構築され、成員カテゴリーにどのような影響を及ぼすのか。

social swearing に対する返答はどのように組織され、成員カテゴリーにどのような影響を及ぼすのか。

この3つに焦点を当て、一連の会話を分析していく。

4. データ

本研究では、高増(2000)が提示する現代アメリカ英語のスウェアワードを含んだスウェアリングを研究対象とする。分析のデータとして、ハリウッド映画の *Legally Blonde* とアメリカのTVドラマ番組の *Sex and the City* に現れる social swearing の場面を使用した。映画・ドラマの中の social swearing を含む一連の会話は、Fitch & Sanders(2005)の手法(付録参照)に則り、トランスクリプトとして示し、分析した。

5. 分析結果

social swearing は、一般的に社会的距離が近いものの中で起こる。しかし、今回研究を通して、初対面という間柄においても、スウェアリングが social swearing として上手く機能することが明らかになった。3つの会話のデータから、初対面という間柄においてスウェアリングがどのように social swearing として構築されていくのかを解明する。5.1. では social swearing として機能しているスウェアリング(本論文ではこれを「仲間意識を構築するスウェアリング」と名付けた) 5.2. では social swearing ではないスウェアリング、そして 5.3. では social swearing として機能していないスウェアリング、の順に分析結果を提示していく。

5.1. Social swearing として機能しているスウェアリング(仲間意識を構築するスウェアリング)

この会話は *Legally Blonde*²⁾ のワンシーンで、初対面という間柄でスウェアリングを social swearing として作り上げる様子を見ることができる。Aはこの映画の主人公の女性 Elle、BとDはネイルサロンの女性店員(Bは中年女性) Cは郵便配達男性である。このシーンは、ふられた彼を追いかけてハーバードのロースクールに入学したAが、彼にフィアンセを紹介されショックを受け泣きながらネイルサロンに駆け込むところから始まる。Aはネイルサロンの店員Bに初めて会うが、自分の失恋話について語り始める。その話の中でBは一方的に示されている“hell”(94)と“bastard”(98)というスウェアリングを使うが、それをAとBが相互行為を通して social swearing として作り上げていく様子を見ることができる。ネイルサロンという場所は女性が世間話をし、仲良くなる典型的な場所であるが、それだけでスウェアリングが social swearing としてはたらいっているとは言えない。AとBが相互行為を通してどのような成員カテゴリーを作り上げ、スウェアリングを social swearing として機能させているのか、事前連鎖と返答を中心にその過程を説明する。

まず、この会話にはトピックから大きく分けて3つの連鎖が見られる。連鎖1は失恋話が話題となっている1~66である。連鎖2は67~84で、Cの登場で失恋話のトピックが一時中断するため失恋話の中で出てくる“hell”(94)と“bastard”(98)のスウェアリングの事前連鎖ではないと判断できる。そして連鎖3はトピックが失恋話に戻る85~99である。“hell”(94)と“bastard”(98)というスウェアリングは失恋話の中で出てきたものであり、その事前連鎖はトピックが失恋話である連鎖1と3のスウェアリングが出てくるまでと捉えることができる。よって5.1. では、連鎖1(1~66)と連鎖3(85~99)を見ていく。

トランスクリプト 1 (1~66)

- 1 A Are you free:? .hhh it's an eme:rgency:
2 B ((eats a doughnut)) Bad da:y?
3 A hhh you can't even ima:gine hhh
4 B ((eat a doughnut)) Spi:ll: ((puts down doughnut and a
5 magazine that she has))
6 (0.7)
7 A >I worked so hard to get into la:w school .hhh I blew off=
8 =Greek week to study for the LSATs .hhh I even hired a=
9 =Co:ppola to direct my admissions video .hhh all to get my=
10 =boyfriend Warner back and now he's engaged to=
11 =this-aw:ful girl Vivian hhh so it was all for nothing you=
12 =know< .hhh and I I just wish hhh
13 (0.8)
14 A .hhh I just wish I had never gone to Ha:rva:rd
15 (1.4)
16 B After you went to a:ll that trouble:
17 (0.5)
18 A >.h he's enga::ged (.) she's got the six-carat Hary Winston=
19 =on her< bo:ny unpo:lished finge::r: .hhh=
20 B = °O::h°=
21 A =hhh
22 (0.9)
23 A What am I suppo:sed to do::
24 (1.2)
25 B You're asking the wro:ng gi::rl
26 (0.8)
27 B I mean-
28 (0.5)
29 B I'm with my guy eight years and then one day it's
30 (0.8)
31 B I met someone el:se
32 (0.6)
33 B mo::ve o:ut=
34 A =O:h no:: .hhh
35 (0.5)
36 A °Tha:t's aw:fu:l°=
37 B =De:wey kept the trailer and my pre:cious baby Ru:fus
38 ((shows a picture of her pet dog)) I didn't even get to throw=

- 39 =him a bi:rthday pa:rti=
- 40 A = No::
- 41 (1.5)
- 42 B What's a gi:rl to do:
- 43 (1.0)
- 44 B He:'s a gu:y who follow his pecker to gree:ner pa:sture::s
- 45 (0.8)
- 46 B and I'm a middle-aged high-school dro::po::ut
- 47 (0.9)
- 48 B who's got stretch ma:rks and a fat a:ss
- 49 (1.3)
- 50 A °That's te:rri:ble:°
- 51 (0.8)
- 52 B Ye:p (.) happens e:very da::y
- 53 A ((nods))
- 54 (2.0)
- 55 B So what's this Vivian go:t that yo:u don't ha:ve
- 56 (0.5)
- 57 B THREE:: TI:TS?=
- 58 A =hhh >she's from Connecticut= she belongs to his stu:pid=
- 59 =county club <. hhh =
- 60 B =Is she as pretty as you?
- 61 (0.9)
- 62 A .hhh she could use some mascara and some serious=
- 63 =highlight but
- 64 (0.5)
- 65 A She:'s not comple:tely: unfor:tunate looking hhh
- 66 B ((nods))

ネイルサロンに駆け込み、Bを見つけたAは“Are you free:?”(1)と問いかけ、話を始める下準備をする。また eme:rgency(1)という単語を使うことにより B の注意を引こうと試みている。“Are you free:?”(1)と質問を受けたBが更に“Bad day”(2)とAに問いかけ、Aの発話を促し、話を聞く姿勢を示す。Aの“hhh you can't even ima:gine hhh”(3)という返答は、物語の前置きで、これから始める発話が長くなることを示すと同時に、Bから物語を話し始める許可を得ようとしている。Bが“spill”(4)と言うことにより、Aに物語を語る許可を与える。6は物語を話す許可ももらったAの沈黙である。ここでAは短い沈黙を作ることで、これから物語を語る合図をBに送っている。1~6ではAとBが共同でAの長い語りを始める下準備を行っている。

7~21でAは自分の失恋話の経緯を語ることで自己開示を行っている。16でBは同意を表すコメントをし、20でもあいづちを打つことでAの話に共感していることを示している。相手の話

に同意したり、共感するという事は、初対面という間柄において社会的距離を縮める手段として有効だ。7~21 では、B が A の失恋話に共感することで、A との社会的距離を縮めようとしている様子がうかがえる。

23 で A は B にアドバイスを求める。24 の(1.2)はアドバイスを求められた B の沈黙である。25 で“You're asking the wrong girl”(25)と自分にはアドバイスをする権利がないことを示している。ここで面白いのは、明らかに A より年上で“girl”(25)というカテゴリーに属さないはずの B がここであえて“girl”(25)という単語で自分を指していることだ。“girl”(25)という単語を使うことで、B は中年の女性で A より年齢は上であるが、恋愛においては“girl”(25)という範疇に属する A と同じ目線で話をしていること、すなわち仲間意識を表している。

27 で B が発言権を獲得し、アドバイスできない理由を語ろうとする。ここで“I mean-”で一時話を中断しているのは、物語の前置きで、これから始める発話が長くなることを示すと同時に話し始める許可を A から得ようとしているためだ。28 の(0.5)は27 で話を完結させていない B の沈黙である。ここで B は沈黙を作ることで、A から話し始める許可を得ようとしている。しかし、A はここで B の話を中断せずに、何も発言しないことで B に物語を語る権利を与えている。29~53 で今度は B が自分の失恋話について語る。B も自分の失恋話について語ることで自己開示を行っている。34 での A の“=O:h no: .hhh”(34)というあいづち、36 での“°That's aw:fu:l°=”というコメント、40 の“= No:”(40)という強調されたあいづち、50 でのコメント、53 での頷きは、B の話に共感できることを示している。29~53 では今度は B の失恋話に A が共感することで、A が B との社会的距離を縮めようとしている様子がうかがえる。

55 では B が発言権を獲得し、A の失恋話にトピックを戻し、恋のライバルについて質問している。56 の(0.5)は質問を受けた A の沈黙である。この沈黙は A がすぐに答えられないことを示している。57 で、すぐに答えられない A に対し、B が冗談めいた例を出している。冗談というものは社会的距離が近い間柄でないと起こらない。よって B は冗談を発することで A との社会的距離が近くなったことを示している。58~59 で A は=の記号で示されるように、55 の B の質問に答える。60 で、B が A の恋のライバルについて更に詳しく質問する。61 の(0.9)は質問を受け返答を考えている A の沈黙である。62~65 で A が 60 の B の質問に答える。66 で B は頷くことにより、A の恋のライバルについて理解したことを示している。

トランスクリプト 2 (85~94)

- 85 (2.1)
86 B Are you sure this Warner guy is like
87 (0.7)
88 B THE:: O::NE
89 (.)
90 A De:fin:tely: (.) I lo:ve him
91 B ((nods)) mh:::
92 (0.5)
93 B >Well if a< girl like you can't hold on to her ma::n (.) then=
94 =there sure as he:ll isn't any hope for the rest of u:s

- 95 (2.5)
- 96 B What are you waiting fo:r: ((stare at A))
- 97 A ((A stare at B))
- 98 B Ste:al the ba:sta:rd ba::ck ((smiles at A))
- 99 A ((smiles at B))

86 で B が発言権を獲得し、トピックを失恋話に戻し A に質問する形式をとる。87 の (0.7) は前のターンで質問を完結させていない B の沈黙である。ここで B は沈黙を作ることで、これから大事なことを A に質問するという合図を送っている。沈黙のあと、88 で B は質問を完結させる。90 で A が “De:fin:tely: (.) I lo:ve him” (90) と強調して前の彼氏 Warner が好きだと答える。91 で B は頷くことにより、A の気持ちを理解、確認したことを示している。93 で B が発言権を獲得し、“hell” (94) というスウェアリングを含んだ発話を行う。この “hell” (94) が、自分達の陥っている状況を嘆く罵りのスウェアリングでないことは、後に続くスウェアリングに対する返答の連鎖で明らかになる。また B はここで “us” (94) という単語を使うことにより A と自分が同じカテゴリーに属すること、すなわち仲間意識を示している。95 の (2.5) は、前のターンで話を完結させていない B の沈黙である。ここで B は少し長めの沈黙を作ることにより A の注意を引き、大切なことを言う合図を送っている。沈黙のあと、96 で B はここでも未完結な発言をし、A を見つめる。見つめることで B は更に大事なことを言うのだという合図を A に送り、発言する許可を得ようとしている。97 で A も見つめ返すことにより、B の話を聞く姿勢にあること、つまり B に発言する許可を与えている。また 94 の B のスウェアリングに対し、ここで初めて見つめ返すという A の返答が見られ、これは B のスウェアリングに悪意はなく、罵りのスウェアリングでないと理解したことも示している。97 で B は “bastard” (98) というスウェアリングを含んだ発話を行い、A に微笑む。スウェアリングを使って微笑む行為は罵りのスウェアリングではまず見られないだろう。B は微笑むことで、“bastard” (98) が A の前の彼氏をけなす罵りのスウェアリングではなく、スウェアリングに悪意はないという合図を送っている。99 で A も微笑み返すことで、A は B のスウェアリングに悪意はなく、罵りのスウェアリングではないと理解したことを示している。

では、これまで見てきた 2 つの連鎖 (1~66、85~99) ではどのような成員カテゴリーが達成され、“hell” (94) と “bastard” (98) というスウェアリングはどのようなはたらきをしているのだろうか。スウェアリングの事前連鎖では、A も B も互いに自分の失恋話を通して自己開示を行い、あいづち、相手の話に同意を示すコメント、頷くことで互いの話に共感し、girl や us という単語を使い、相手の話に割り込んだり、オーバーラップで話を中断させるということもなく、お互いに仲間意識を示し合って歩み寄っている。よって A と B が共同で、同じ「失恋経験者」という成員カテゴリーに属していることを達成しようと試みている様子が伺える。また会話全体を通して、A と B が同じ「失恋経験者」という成員カテゴリーに属していることを達成していることが説明できる。西坂 (1997) に述べられているように、Sacks の成員カテゴリー化装置によると、A は「客」、B は「店員」という対照的なカテゴリー対にあてはめることができる。スウェアリングは一般的に社会的距離が近いもの同士の間で起こり、誰にでも使うことのできるものではない。「客」と「店員」というカテゴリー対においては通常起こりえないものだ。ではどうしてこの場面で “hell” (94) と “bastard” (98) というスウェアリングが用いられているのだろうか。1~21 は A の失恋話である。

“What am I supposed to do”(23)という台詞から A は B に対し「客」としてではなく、「相談者」というカテゴリーで話をしていることが分かる。「相談者」と結びつくカテゴリーは一般的に「カウンセラー」であろう。しかしこの場面で B を「カウンセラー」というカテゴリーにあてはめることは適切ではない。「相談者」と「カウンセラー」というカテゴリー対は一般的に「素人」「専門家」と結びつく。「専門家」は「素人」よりもその専門分野（ここでは恋愛）において優れており、「素人」に対し何らかの助言を与えることが期待される。しかし B は A の相談事に対し“You’re asking the wrong girl”(25)と答え、自分がその分野（恋愛）において優れた存在ではないことを示し、助言をする代わりに自分が A と同じ境遇にいること、すなわち自分の失恋経験について話している。この B の“You’re asking the wrong girl”(25)「自分はその相談にアドバイスするにはふさわしくない人だ」という発言から「相談者」「カウンセラー」というカテゴリー対は適切でないことが分かる。ここで A と B に適用されるべきカテゴリーは「失恋経験者」であろう。2 人は「失恋経験者」という同じカテゴリーに属しており、もはや「客」と「店員」というカテゴリーは適切ではないことが分かる。よって A と B は相互行為を通して同じ「失恋経験者」という成員カテゴリーに属することを達成している。また、スウェアリングに対する返答として、「相手を見つめる(97) - 微笑む(98) - 微笑む(99)」という同じ成員カテゴリーに属していることを確認し合う相互行為的連鎖が見られた。このようなスウェアリングの事前連鎖と返答の連鎖から、この会話において“hell”(94)と“bastard”(98)というスウェアリングが、自分達の陥っている境遇を嘆いたり、A の前の彼氏をけなし反感を買うような罵りのスウェアリングではなく、A と B の間で仲間同士の連帯を確認するための social swearing としてはたらいっていることが分かる。

では、この会話ではなぜ、social swearing が使われているのだろうか。スウェアリングは社会的距離の近い厳選された相手にしか使えないことばで、スウェアリングで仲間意識を構築するということは、相手が誰であっても簡単に達成できるものではない。よって相互行為を通してスウェアリングを social swearing として上手く機能させることができれば、初対面という社会的距離をすばやく縮めることができる。スウェアリングが見られるまさにその場所で A と B の間で初対面という社会的距離が一気に縮まり、仲間意識が構築されているのである。よってこの会話では、初対面という間柄ですばやく社会的距離を縮め、仲間意識を構築するために、スウェアリングが使われていると言える。このように、初対面の間柄においては、social swearing は仲間意識の構築をすばやく達成するはたらきもあることが本研究で発見できた。本論文ではこれを、「仲間意識を構築するスウェアリング」と名づける。

5.2. Social swearing ではないスウェアリング

またこの会話の連鎖 2(67~84)で（失恋話のトピックが一時中断される連鎖で“hell”(94)と“bastard”(98)というスウェアリングの事前連鎖ではない）で示されるように、“shit”(79)と“goddamn”(81)という B のスウェアリングが見られるが、このスウェアリングは先に挙げた“hell”(94)や“bastard”(98)と異なり、A と B の間で「仲間意識を構築するスウェアリング」として機能していなことが分かる。

トランスクリプト 3 (67~84)

67 C Hello la:di:es=

68 D =Hey there=

- 69 C =How you doing (.) sign here ((looks around))
 70 B nn:: ((stares at C))
 71 C ((smiles at B))
 72 B ((smiles at C)) h::i ((spills the water)) °oh je:ez °
 73 (0.5)
 74 B °O::h look what I di::d°
 75 C See you later
 76 (.)
 77 D (bye-bye sugar)
 78 C ((smiles at B))
 79 B ((smiles at C)) a::w shit-
 80 (1.2)
 81 B COULD I HAVE BEEN ANY MORE GO:DDA:MN=
 82 =SPA:STIC?
 83 (1.0)
 84 A °It's o:k::°
 85 (2.1)

ここではまず、仲間意識を構築するスウェアリングの時とは違う成員カテゴリーが見られる。B (A と失恋話をしていた中年のネイルサロンの女性店員) と C (郵便配達男性) は互いに笑いかける行為が 2 回も見られることから(71~72、78~79)、今初めて会ったというわけではなく、互いを「仲間」という同じカテゴリーに属する者として捉えていることが分かる。次に C と D (ネイルサロンの女性店員)の間では、67 の C の発話“Hello ladies”(67)に対し D から“Hey there”(68)と答えが返ってきており、D は C に対し“sugar”(77)と呼びかけている。このような呼称は通常「仲間」の間でのみ使われる。よってここでも C と D はお互い相互行為を通して「仲間」という同じ成員カテゴリーに属することを達成している。一方 B と D においては、この 2 人の間で会話がなされることはないので、成員カテゴリーは作られていない。よって“hell”(94)や“bastard”(98)というスウェアリングの事前連鎖 67~78 で作り上げられる成員カテゴリーは B と C の「仲間」と C と D の「仲間」という成員カテゴリーだけである。この 67~79 までの事前連鎖で A が全く会話に関与していないので、B と C に対しても、C と D に対しても A は「部外者」という対になる成員カテゴリーが成立し、ここで A と B の間で同じ成員カテゴリーに属するという事は達成されていない。また、79 と 81 の B のスウェアリングに対し、(1.2)の沈黙で示されるように、A の戸惑っている様子が伺え、“°It's o:k::°”(84)で示されるように小さな声で返答し、その後の 85 で(2.1)の沈黙が見られ、この返答は同じ成員カテゴリーに属していることを確認し合う相互行為的連鎖とは言えない。よって B の“shit”(79)と“goddamn”(81)のスウェアリングは、A と B の間で仲間意識を構築するスウェアリングとして機能していないことが分かる。また“shit”(79)と“goddamn”(81)という B のスウェアリングは、この会話に全く関与していない A に向けられているものではなく、B が自分自身に発したもので、94、98 の仲間意識を構築するスウェアリングとは性質が異なることも明らかである。この例からも、スウェアリングを「仲間意識を構築するス

ウェアリング」として機能させるためには、事前連鎖において同じ成員カテゴリーに属していることが達成されることが重要であることが分かる。

5.3. Social swearing として機能していないスウェアリング

次に *Sex and the City*³⁾ のワンシーンから、初対面の間柄でスウェアリングが「仲間意識を構築するスウェアリング」として上手く機能しない例を見てみよう。A は男性、B はゲイの男性、C はドラマの主人公の女性で、新聞に定期的に「Sex and the City」というコラムを書いている 30 代の美人独身ライターだ。B と C は仲の良い友達である。このシーンは B と C がランチタイムにバーのカウンターで話をしている際に、偶然 A が現れるところから始まる。A と B は知り合いだが、A と C は初めて会う。偶然出くわした A は、B の紹介で初対面の C と会話を交わし、B と C を明日開かれるパーティーに招待する。このシーンでは初対面であるにも関わらず、先ほどの *Legally Blonde* の例と同じように A が一方的に C に対し で示されている“shit”(8)や“fucked up”(13)というスウェアリングを使い、これが A と C の間で「仲間意識を構築するスウェアリング」として上手く機能していない様子を見ることができる。この会話では 2 つの連鎖が見られる。連鎖 1(1~5)は友達である A と B が偶然出くわして挨拶を交わす連鎖で、連鎖 2(5~36)は B が A、C にお互いを紹介し、初対面の A と C が会話をする連鎖である。“shit”(8)や“fucked up”(13)は連鎖 2 で見られるので、その事前連鎖は連鎖 2 の 5 からそれぞれのスウェアリングが出てくるまでだと捉えることができる。よって連鎖 2(5~36)を見ていくことにする。(“ass”(3)は連鎖 1 なのでスウェアワードではあるが、今回の研究では分析対象としない。)

Sex and the City トランスクリプト 1 (1~36)

- 1 A He::::y Stanfor:::d=
2 B =Hey Jared how are::: you:::?
3 A ((put his head on one side)) My book was well kick ass=
4 =reviewed in Entertainment Wee::kly=
5 B =How mar:::velous (.) Oh- Jared have you::: met Carrie=
6 =Bradshaw:::?
7 (0.8) ((A moves in front of C from behind C))
8 A ° No° but I've read your co:::lumn (.) nice shit= ((A and
9 C shake their hands))
10 C =hhh Tha:::nks
11 (0.4)
12 A ° You° should write about me::: sometime my life's=
13 =so::: fucked up right now
14 C ((gives a wry smile))
15 (0.8)
16 B Oh Carrie::: Jared is the writer of the book Avenue B:::
17 C (.) ((C nods her head))
18 B And New York Magazine just named him one of the 30=

19 =coo::lest people under 30 in the city=
20 C =Wo:::w What an ho:::nor::?=
21 A =You know if they were doi::ng the 30 sexi~~e~~st wo:::men=
22 =under 30 you'd top the list=
23 C =hh You're:: quite the storyteller aren't you::=
24 A =h-h-h That's no:: lie Listen the magazine's party is=
25 =tomorrow at Lu:::na:: I'll put your names at the=
26 =doo:::r=
27 B =Oh:: Tha:::nks
28 (0.8)
29 A So you'll be:: there:::?
30 C ((puts her head on one side)) I'll do my be:::st
31 (0.6)
32 A Groo:::vy ((put up his right thumb)) Cia:::o ((pats B's
33 shoulder and walks away))
34 (1.4)
35 C ((has a strange look on her face)) h-h ((gives a wry
36 smile))

Bは“Oh- Jared have you:: met Carrie Bradshaw::?”(5~6)と言ってAにCを紹介する。7の(0.8)の沈黙は、Bから質問を受け、それに答える義務のあるAの沈黙である。この沈黙中Aは、Cの後から前へと移動している。ここでAは初めて会うCをチェックし、話し相手をBからCに切り替えるための行為に出る。Aは、Cと初対面で初めてことばを交わす仲であるにも関わらず、“shit”(8)というスウェアリングを使ってライターであるCの新聞に掲載されているコラムを褒める。一般的に、初対面という場面において、5~6でCを紹介されたAは、このターンで自己紹介をすることを求められる。しかしAは通常の相互行為規範から逸脱し、自己紹介をせずに、“shit”(8)というスウェアリングを使ってCのコラムを褒める。一般的にノンスタンダードと捉えられているスウェアリングの使用は一定の文脈で「社会的な距離の近さの表明」と結びつく。また、褒めるという行為も、相手との社会的距離を縮める時に行われる。初対面の場面では特にそうである。Aが通常このターンで求められる自己紹介を省き、すぐにスウェアリングを使ってCを褒めるという行為に出たことから、Aの一刻も早くCとの社会的距離を縮めたいという様子が伺える。AはCのコラムを“shit”(8)というスウェアリングを使って褒めた後、Cと握手をする。“shit”(8)というスウェアリングが、AとCの間でどのようにはたらいているかは、隣接ペア、後続の連鎖を見る必要がある。Cは、“=hhh Tha:::nks”(10)と沈黙なしに、すぐに笑ってお礼を言う。ここで注目したいのは“hhh”(10)という笑いである。褒められて笑うという行為に出るのは、照れ隠し、もしくは相手の褒めに戸惑った時である。この笑いは初対面であるにも関わらず、自己紹介もせずにスウェアリングを使って褒めるという通常の相互行為規範から逸脱したAの発話に対する、Cの戸惑いの笑いとして捉えることができる。事前連鎖で仲間意識の確認、同じ成員カテゴリーに属していることが達成されていないこと、そしてCの戸惑いの笑いの返答から、8

で A が C との社会的距離を縮めるために使った“shit”(8)は A と C の間で「仲間意識を構築するスウェアリング」として上手く機能していないことが分かる。

12 で A が発言権を獲得し、C に対して“° You° should write about me:: sometime”(12)「自分の事もコラムに書いて欲しい」と言うが、この発言は、自分についてもっとよく知って欲しいということを表しており、これも C との社会的距離を縮めたいことを示す発話として捉えられる。また、A は“fucked up”(13)というスウェアリングを使って自分の最近の生活について自己開示を行っている。自己開示と「社会的な距離の近さの表明」と結びつくスウェアリングの使用も、A が C との社会的距離を縮めたいという相互行為上のはたらきかけとして捉えることができる。これに対し 14 で C は、苦笑いを見せるだけである。C 自身も A についてもっと知りたい、A と仲良くなりたいという気持ちが本当にあれば、“° You° should write about me:: sometime”(12)「自分の事もコラムに書いて欲しい」という発話に対する何らかのコメントが見られるはずである。この返答から、表面的には笑いを見せるが、戸惑いを隠せない C の様子が伺える。この C の苦笑いの返答から、13 で A が C との社会的距離を縮めるために使った“fucked up”(13)も A と C の間で「仲間意識を構築するスウェアリング」として上手く機能していないことが分かる。

15 の(0.8)の沈黙は発話の移行適切所である。14 までの会話で、もしも A と C の社会的距離が縮まっていたならば、ここで A が発言権を獲得するか、C が笑った後に話を続けることになっていただろうと予想される。しかし、次のターンでは B が発言権を獲得し、改めて C に A を紹介する連鎖が見られる。B がこのような行動に出たのは、A と C の社会的距離はまだ縮まっておらず、第三者のサポートが必要だと感じたからだと言える。A を改めて紹介された C は、17 で何のコメントもなしにただ頷くだけである。ここでもし C が A に興味を示し、社会的距離を縮めたいという気持ちがあったならば、C は A に対して質問や何らかのコメントをするはずである。しかし、C が何の興味も示す様子がないので、B は更に 18~19 で A の紹介を続ける。C はやっとな “Wo::::w”(20)という驚きを表し、A のことを褒める。C がやっとな興味を示したので、21~22 で A は=の記号で示されるようにすぐにコメントする。初対面の間柄においては、褒められたらお礼を言うというのが一般的である。(10 で C は通常の初対面で求められる規範に従い、褒められてきちんとお礼を言っている。)しかし、A はお礼や褒められたことに対しても何もコメントをせずに、C の事を褒め返す。「褒められて - 褒め返す」という隣接ペアは、背景的知識を共有している社会的距離の近い間柄において見られるものである。初対面や社会的な上下関係が明らかである間柄、またフォーマルな場面においては、「褒められて - お礼を言う」という隣接ペアが一般的である。よって、A がここでも一刻もはやく C との社会的距離を縮めようとしていることが分かる。23 で C は戸惑いや沈黙なしに、“You’re::: quite the storyteller aren’t you:::”(23)「あなたは嘘つきなんじゃないの？」と A の性質について述べる返答を見せる。戸惑いや沈黙がないので、一見会話はスムーズに流れ、A の社会的距離を縮めようという試みに対し、表面的には C もそれに応じているかのように見える。しかし、“You’re::: quite the storyteller aren’t you:::”(23)「あなたは嘘つきなんじゃないの？」という発言は、相手がどういう人なのかを探る時に使うもので、相手を探るといふ行為に出るのは、相手のことを良く知らないということの表れである。よって C の発話から、C は A とは異なり、初対面という間柄の会話のフレーム内で対応していることが分かる。

24~26 で A はトピックを変えて、次の日のパーティーに B と C を招待する。names という単

語が複数形になっていることから、BとCの2人をパーティーに招待しているのは明らかである。Bは沈黙も戸惑いも見せずに“=Oh:: Tha::nks”(27)「ありがとう」とコメントする。28の(0.8)の沈黙は、パーティーに招待されたにもかかわらず、何の返答も返さないCの沈黙である。この沈黙は、Cがパーティーの話にあまり乗り気でない様子を表している。返答をしないCにAが“So you’ll be::: there:::?”(29)「君も来れる？」と質問している。ここで何らかの返答をする義務があるCは首をかしげ、“I’ll do my be:::st”(30)「できればね」と返答する。この返答からもCがパーティーの話にあまり乗り気でない様子は明らかである。その後のAの、“Groo:::vy”(32)や“Cia:::o”(32)というくだけた表現は、初対面という間柄で普通は使われない。初対面という間柄においては、“Nice to meet you”などの別れの挨拶が適切だろう。よってここでもAはくだけた表現を使うことにより、Cとの社会的距離を縮めようとしていると言える。34の(1.4)の沈黙は、一見Aから別れの挨拶を受けたBとCの沈黙のように見えるが、32~33の発話の後Aはすぐに去っていくのでここでBとCには別れの挨拶は求められておらず、これは誰にも属さない沈黙である。その後のCの反応(35~36)の変な顔や苦笑いはCの困惑を表している。

ここでは、Aの、初対面という間柄で求められる相互行為規範から逸脱したり、Cを褒めたり、自己開示をすることで、Cとの社会的距離を縮めよう試みるスウェアリングの事前連鎖が見られたが、CがAとの社会的距離を縮めようとしている様子は一切見られない。よってスウェアリングの事前連鎖でAとCがお互いに仲間意識を確認し合い、同じ成員カテゴリーに属するということは達成されていない。そしてスウェアリングに対する返答として、「戸惑いを隠せない笑いを含んだ返答(10) - 沈黙(11)」「苦笑いで返答(14) - 沈黙(15)」が見られ、これは同じ成員カテゴリーに属していることを確認し合う相互行為的連鎖ではないことが分かる。このようにスウェアリングの事前連鎖と返答から、この例で見られるAのスウェアリングは、AとCの間で「仲間意識を構築するスウェアリング」としては機能していないことが分かる。

また、AとCの間で、仲間意識を構築するスウェアリングが上手く機能していないことは、この会話全体を見ても明らかで、その理由としてSacksが言う「カテゴリーに結びついた行動」のズレが挙げられる。Aは、初対面であるにも関わらずスウェアリングを使い、そのような間柄で求められる規範から逸脱したり、Cを褒めたり、自己開示をしたり、社会的距離の近い間柄で用いられる隣接ペアを採用したり、くだけた表現を使ったりすることにより、Cとの社会的距離を縮めようとして試みている。Aは、会話において自分とCに対し、「仲間」や「友達」という比較的社会的距離の近い間柄という同じ成員カテゴリーを適応し、社会的距離を縮めるような行動に出ている。一方Cは、褒められても戸惑いの笑いで返答したり、苦笑いを見せ、Aのことを詳しく紹介されても興味を示さず、初対面という会話のフレームで話をしたり、パーティーに招待されても乗り気でない。このようなCの行動は、社会的距離の遠い「初対面」や「見知らぬ人」という成員カテゴリーに結びついた行動である。つまりCは、この会話において自分とAに対し、「初対面」や「見知らぬ人」という社会的距離の遠い成員カテゴリーを適用しているため、この会話でCが社会的距離を縮める様子は見られないのである。よってこの会話全体を通してAがCとの社会的距離をすばやく縮めようとして用いているスウェアリングは、AとCがお互いに適応している成員カテゴリーのズレが原因で、AとCの間で「仲間意識を構築するスウェアリング」として上手く機能していないことが分かる。この例からも、やはりスウェアリングを「仲間意識を構築するスウェアリング」として機能させるためには、同じ成員カテゴリーに属していること

が達成されなければならないと言える。

6. まとめ

今回の研究で、初対面の間柄で見られる social swearing には、仲間意識の構築をすばやく達成するはたらきがあることを発見し、これを「仲間意識を構築するスウェアリング」と名づけた。

「仲間意識を構築するスウェアリング」として機能している例(5-1)と、機能していない例(5-2、5-3)から、初対面という間柄において、スウェアリングを「仲間意識を構築するスウェアリング」として機能させるためには、参加者同士がスウェアリングの事前連鎖において仲間意識を確認し合い、お互いが同じ成員カテゴリーに属するということを築き、またスウェアリングに対する返答として、同じ成員カテゴリーに属していることを確認する相互行為的連鎖が必要だということが確認できた。スウェアリングが会話の中でどのような機能を持っているのかを判断するには、会話の連鎖において参加者同士がお互いにどのような成員カテゴリーを作り上げているのかを見ていくことが重要であるということが本研究において明らかになった。

本研究の結果から、ことばの意味や機能はそのことば自体にあるのではなく、相互行為を通して参加者によって作られていくものだということも明らかになった。この視点から考えると、これまでのスウェアリングの分類法でスウェアリングの機能が上手く説明できないのは当然のことであり、分類法だけでは十分でないことも多々あると言えるだろう。

また、映画・ドラマを用いた会話分析を行ったことも、先行研究では見られない本研究の大きな貢献であると言える。映画・ドラマをデータとして会話分析を行ったことで、自然発生的な会話では録音不可能な初対面の人同士のスウェアリング、social swearing が上手く機能しない例などバリエーション豊かなデータの収集が可能になった。自然発生的な会話と異なり、映画・ドラマでの会話は計算されており、会話で達成されるべき事柄が明確である。また、映画・ドラマで用いられるスウェアリングは、視聴者を意識して製作されているため、自然発生的な会話の中でも最も代表的で、視聴者にとって理解可能なものが採用されている。よって映画・ドラマをデータとして扱ったことで、「仲間意識を構築するスウェアリング」の最も典型的かつ一般的な構築過程を提示することも可能になった。自然発生的な会話の録音では得られない言語現象の一般的かつ典型的な例を提示したい時、映画・ドラマをデータとして扱うのは有効な手段であると言える。ただし、映画やドラマというものはエンターテインメントの要素が絡み、日常では使わない誇張表現が多く使われていることも否定できない。よって今回の分析結果は「仲間意識を構築するスウェアリング」のほんの一例にすぎず、自然発生的な会話においても全く同じ手順で「仲間意識を構築するスウェアリング」が達成されるかどうかということは今後の課題である。

註

- 1) 本研究にあたって、ご指導頂いた琉球大学大学院での指導教官の宮平勝行氏、また多くの貴重な助言をくださった匿名の査読者各位に深く感謝いたします。ただし、本文中に残存する誤りの責任は筆者にあります。
- 2) Elle というブロンドの女性が主人公。Elle は突然、彼氏 Warner にふられ、彼とよりを戻すために、Warner の目指すハーバードのロースクールに自分も入学する。しかし Warner には既に同じハーバードのロースクールに通う婚約者がいる。最初は Warner を取り戻そうと必死な Elle が、興味のなかった法律の勉強にだんだん熱心になる。さまざまな困難を乗り越えた結果、Elle は学生にも関わらず弁護士として裁判で勝利をおさめる。成功した Elle を見て彼女よりを戻したくなった Warner は Elle に告白するが、最終的には Elle が Warner を

- ふり、弁護士になるというサクセスストーリーの映画である。
- 3) Carrie というニューヨークに住む 30 代で独身のキャリアウーマンが主人公。彼女は新聞に定期的に「Sex and the City」というコラムを書いている美人ライター。彼女と彼女を取り巻く 30~40 代の独身キャリアウーマンの女友達 3 人の人生を、恋愛を中心に描いたドラマ。

引用文献

- サーサス、ジョージ (1998) 小松栄一、北澤裕訳 『会話分析の手法』 マルジュ社。
- 高増名代 (2000) 『英語のスウェアリング タブー語・ののしり語の語法と歴史』 開拓社。
- 津田早苗 (1999) 『談話分析と文化比較』 リーベル出版。
- 西坂仰 (1997) 『相互行為分析という視点』 金子書店。
- 山崎敬一編 (2004) 『実践エスノメソドロジー入門』 有斐閣。
- 山田富秋 (1999) 「会話分析を始めよう」 西阪仰、山田富秋、好井裕明編 『会話分析への招待』 (pp.1-35) 世界思想社。
- Anderson, L. & Trudgill, P. (1990). *Bad language*. Oxford: Basil Blackwell.
- Bicks, J. (Producer). (2004). *Sex and the City* [Motion picture] United States. Home Box Office.
- Fitch, K. L. & Sanders, R. E. (2005). *Handbook of language and social interaction*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Have, P. T. (2005). *Doing conversational analysis*. London: Sage.
- Holmes, J. (1992). *An introduction to sociolinguistic*. London: Longman.
- Luketic, R. (2001). *Legally Blonde* [Motion picture] United States. Metro-Goldwyn-Mayer-Pictures Inc.
- Ross, H. (1969). Patterns of swearing. *Discovery: The Popular Journal of Knowledge*, 479-481.

付録

トランスクリプトの記号説明	Fitch & Sanders (2005) 参照
1. {	オーバーラップの開始
2. }	オーバーラップの終了
3. (0.5)	沈黙の秒数
4. (.)	0.2 秒以下の沈黙
5. :	音が伸びている
6. -	単語が途切れている
7. ?	イントネーションが上がっている
8. =	間が無い
9. <u>word</u>	ストレスがある、強調されている
10. WORD	声大きい
11. °word°	声小さい
12.	ピッチの高低
13. ><	速い

- | | |
|-----------|-------------|
| 14.<> | 遅い |
| 15.hhh | 息を吐く、笑い |
| 16..hh | 息を吸う |
| 17.(word) | はっきりと聞き取れない |
| 18.() | 聞き取り不可能 |
| 19.(()) | コメント、記述事項 |